

特別連載II

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第269回

※現在、さくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスの感染防止のため、海外からの招へいプログラムは実施していません。

麻布大学の活動報告



黄 鴻堅
(麻布大学獣医学部
獣医学科教授、当時)

アジアの大学から教員招へい
最新の診療法や獣医学等学ぶ

本プログラムはアジア21カ国24大学の若手教員25人のほか、日本人2人、タイからの交換教員1人およびアルゼンチンからの国際協力機構(JICA)研修員1人を加えた計29人の参加で、2020年1月20日〜29日に実施された。



真菌培養および同定の実習

プログラムのテーマは「Harmony, Fraternity and Networking through learning together and from each other」とし、参加者らは、異国・異文化の仲間からなる5人1組に分かれて実習形式で共同作業を行い、また、講義などではそれぞれの知識を分かち合いながら討議を行った。研修内容は主に、獣医診療学における最新の診断法や精密機械の操作法、および人獣共通感染症や家畜疾病の診断予防法であった。ほとんどの参加者は、異国の研究者と共に学んで意見を交わす機会を初めて経験し、グローバルな学びの環境に感銘を受けていた。また、いずれの参加者も国の代表として高い意識を持ち、緊張感を感じながら積極的に楽し

【参加者の出身国・地域】ウズベキスタン、カザフスタン、パキスタン、ネパール、ブータン、インド、バングラデシュ、スリランカ、ミャンマー、タイ、マレーシア、インドネシア、バプアニューギニア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国、モンゴル国、韓国、台湾、アルゼンチン、日本

実習や討議に参加した。

研修に参加した全員に対して、来日2か月前に、各自の主な研究成果ポスター作成を依頼し、プログラム期間を通して、大学内に展示し、麻布大学の教員と学生が、アジア各国の若手研究者による最新研究について知ることができた。また、ポスター作成者による口頭発表会を設け、参加者全員で各々のポスターを評価し、かつ、改善策などを提案し合った。研究ポスターとは別に、参加者全員に対して、自国の漢方療法や伝統獣医療法などについてのレポート提出を、来日前の課題として依頼した。プログラム期間中に、これらのレポートについて参加者全員が評価し合い、各々の視点から各国の伝統療法について討議した。さらに、自国の獣医学教育についての情報交換も行った。

これらの取り組みを通して、参加者全員がそれぞれの異なる文化や教育の枠組みを超えて学術情報を交換しながら友情を培い、グローバルなネットワークを構築することが出来た。本プログラムでは、外国人だけではなく日本からの参加者も加えられ、日本人が国の代表としての自覚を持って国際感覚を養う機会になったことも、大きな意義があったと考えられた。

プログラムの成果と今後の展望

- 参加者全員が諸外国の獣医学関連の若手大
学教員であり、同様の専門的使命感を持っ
ていたことから、科学的知識だけではなく、
臨床的獣医学教育法などについても、
活発に情報交換や討議ができた。
- 本プログラムは、国際学会や国際ワークシ
ョップと同様のスタイルで行われたことか
ら、国際交流以上の意義があった。
- 参加者は、本プログラムで得た技術や知識
あるいは教育法を、帰国後に母国の教育現
場における学生指導に実用した。このこと

プログラム	
1日目	羽田/成田到着
2日目	開講式、小動物疾病の細胞診標本作成と診断実技 牛乳房炎原因菌同定の実習、歓迎会
3日目	獣医学および医学における真菌の培養と同定 いのちの博物館見学 研究ポスター発表会 1
4日目	精子の凍結保存と融解後の運動性評価 循環器と腹部臓器の超音波診断 パペシア原虫の血液塗抹とreal-time PCRによる検出
5日目	日本住血吸虫症撲滅に貢献した山梨県旧杉浦医院の見学と 住血吸虫症撲滅についての討議 山梨県淡水水族館見学、魚貝類の生態を学ぶ
6日目	検出漏れしないランプ法による鳥インフルエンザと 牛ウイルス性下痢症の診断法 獣医療法における東洋伝統獣医学の応用 犬を用いた鍼灸治療法の実践、諸国の伝統獣医療の討議
7日目	GIS (地理情報システム) を用いた疾病と ベクター節足動物の発生状況調査 JICA横浜海外移住資料館の見学
8日目	日本の動物ワクチン使用現況、各国の獣医教育の紹介 コンピューター内臓断層解析装置によるCTおよび MRI画像の腫瘍診断 馬の疾病の診断と治療、研究ポスター発表会 2
9日目	放射線防護実験 インド行政官と科学技術団と歓談および意見交換 修了式
10日目	帰国



参加者と超音波画像診断実習に使われた犬たち



実習後の集合写真

は、本プログラムの成果が、プログラム以降に参加者のそれぞれの国に広く影響したことを意味する。

●参加者それぞれが構築した国際ネットワークは、国際科学論文作成時に、例えば国際的査読者としての適任者を探す場合に、役に立つ可能性が高い。

●研究ポスター発表では国際学会並みの討論が行われた。この経験は各参加者の実際の国内外の学術学会における発表に役立つ。●参加者各国の漢方療法や伝統獣医療法あるいは獣医学教育制度についての討議および

情報交換を行った。国際学会などの国際イベントにおいてもこのような機会はほとんどない。

●本プログラムでは日本が世界に誇れる獣医学関連の高度な技術や知識を提供し、参加者に強い印象を与えることが出来たことから、参加者が自国学生に対して日本への留学を薦める可能性が高まった。

●JSTが各大学のさくらサイエンスプログラム実行担当者を集め、談話会を開き、情報交換やその後の現場の声を聴ける場を作ればよいと考える。

●さくらサイエンスプログラムでは、日本人の学生あるいは若手教員も、海外からの招へい者と同様にプログラムに参加させるべきである。日本人が国際感覚を養うことにより、将来国際舞台で活躍することが期待できる。

●招へい者に来日前に課題を与えることは有効かつ重要と考える。この課題提出により、訪日の目的やイメージの事前準備ができる。

なお、本プログラムの実施担当は平健介教授と黄鴻堅であった。本プログラム実施にご協力下さった皆さまに心からお礼を申し上げます。